

令和5年度 第1回神戸市地域活動推進委員会

日時：2023（令和5）年7月3日（月）

15時00分から17時00分

場所：市役所1号館14階 大会議室

1. 開会

2. 出席者紹介

（資料1）

○事務局あいさつ

- ・神戸市を含む全国的な現状として、少子高齢化や価値観の多様化、地域活動の担い手がどんどん減ってきている。持続可能なまちづくりを考えると、放置できない課題だと認識している。
- ・そういった多様化・複雑化する地域課題に対して、既存の地域団体やNPO等の新たな担い手、企業、学生といった多様なプレーヤーと協働して解決していく仕組みをつくれないうこと、この4月より新たに地域協働局が立ち上がった。
- ・また、それに併せて、各区役所のまちづくり課を地域協働課に名称変更した。地域協働局と区役所が一体となって地域課題解決や地域活動支援に取り組んでいきたいと考えている。
- ・今後の地域に関する施策を考える上で、この委員会に対して諮問をさせていただきたい。これからの議論を本当に楽しみにしている。皆様方のノウハウ、知見をもとに御議論いただきたい。

3. 議事

（1）委員長の選任

- 委員の互選により、関委員を委員長に選任

（2）神戸市における地域活動の現状と将来へ向けた検討

（資料2）

- 事務局より資料説明

○委員発言

- ・様々な課題がある中で、よく言われがちな課題と言えば担い手の不足。担い手がないというと、どうしても団体や組織の課題だと思いがちである。解決すべきは、既存の団体や組織の課題なのか、地域の課題なのかということ考えたときに、既存の団体や組織の課題を解決することが、果たして地域の課題解決になるのだろうか。
- ・今地域で頑張っている人の声を聞くと、課題として担い手不足を挙げるとは思うが、孤立が進んでいるとか、声をかけ合えるような知り合いが1人もいないといった状況に対して、既存の自治会の担い手を増やすことが果たして解決につながるのか。既存の団体を支援するのか、それとも個人や具体的な活動を支援するのかという点については、改めて考え直すべきだと思う。
- ・これまでの地域活動では、1つの活動が盛り上がり、参加者が多く、地域がまとまっているという状況を目指してきたが、こんなに多様な人が暮らしている時代に、ワンテーマでみんなが盛り上がるなんていう地域の状態を目指すのは現実的ではないし、その地域での旗振り役を無償で引き受けるのは非常にハードルが高く大変だと思う。
- ・今の地域は、ワンチームになるというよりは、個人にとって近所に何人か知り合いがいるような、3人から5人のつながりがたくさんあって、全員が漏れなくその小さなつながりのどこかに入っている、といった状況を目指すべきなのではないかと思っている。
- ・今も頑張っておられる地域団体の方々に敬意を表するとともに、1つの団体が旗振り役になることを目指すのではなく、小さい活動がたくさんあるとか、活動の旗を振れる人がたくさんいる状況を目指してもいいのかなと思う。地元の地縁団体やNPOが地域に複数あってもいいし、やりたいと思ったことを近所の人に声をかけてみたり、単発のイベントがたくさんあってもいい。そういった複層的に共

存していく動きがあってもいいのかなと思っている。

○委員発言

- ・神戸市は古くからある集落単位の地域活動が非常に盛んであり、神戸市もそのような地域団体の独自の取組を応援するという形でまちづくりを進めてきた特徴があると思っている。その地縁団体も地域によって様々で、神戸市に合併する前からある町、村単位の集落のまとまりが強く残っている地域もあれば、自治会の活動が盛んなところもあると考えている。
- ・今まで継続してきた神戸らしい地域活動を大事にしつつ、元からある地域ごとの取組や違いを踏まえた上で、共働き世帯の増加やNPO等の地域活動の担い手の増加といった最近の時代の移り変わりを反映した新たな動きにどう取り組むかを考えていきたいと思う。

○委員発言

- ・地方自治の本旨が憲法第92条にあるが、そこには両輪があり、1つは住民自治で、自治会や婦人会、ふれあいのまちづくり協議会等の住民の方々主導の地域づくり。2つ目は団体自治として市役所の政策がある。このバランスについては、住民自治が団体自治に先行してあるべきだと思っている。
- ・全国的には、これまでは自治会が地方政府的役割を担い、セーフティネットの役目も果たしてきたため、自治会の役割は大きかった。ところが、今の自治会は担い手が高齢化し、固定化し、不足し、男性に偏っている。さらに、今までは自治会を支援し、自治会と対話していけば地域の総意が分かったが、この総意と今の地域の総意とには食い違いが生じている。その理由として、自治会への加入率の低下や、地域の意見が実は自治会役員の方の意見でしかなかったりすることがある。
- ・住民自治の前に家族自治というものがあり、8050問題ばかり、老老介護や貧困問題、あるいは孤独孤立、孤独死の問題等、自治会に入っているか入っていない

かではなく、生活レベルで困っている市民の問題をどのように解決していくのかを並行して議論する必要があると思う。

- また、1995年以降は、その生活レベルで困っている市民の問題の一部分をNPOがカバーしてきたが、いわゆる地縁団体との交わりがうまくいっている事例がほとんどなく、対話できていない。この辺りも調査が必要なのではないか。
- 例えば、自治会やNPOに、今までの活動の中でNPOまたは自治会と協働したことがあるかとか、協働したいと思うかとか、ニーズを尋ねる必要があると思う。やっている行為そのものは近いがミッションやマインドが全然違うため、なかなか相入れない組織である。NPOは、ほっとけないし、ほっとかないというマインドで動いており、地縁団体は義務感と使命感で動く。
- 地域ごとでのやり方やルールはもちろん違っていいが、行政がやるべきこと、地域の中で地域自治を頑張っていたこと、その棲み分けの合意形成が本当に難しいと思っている。
- 住民自治と、その前にある家族自治の問題が地方自治全体の議論の前提を大きく変えてきている状況を我々がどのように認識し、どのように考えていけばいいのか。
- 例えばミニマム自治会というものがある。ある地域では、会費も役員もなく、夏祭りだけをやるために自治会を残している。それも参加したい人だけお金を払って参加する、つまり参加しない人はお金をとられないという公平性を担保している。もしかすると今後の自治会はそこまでミニマムになっていく可能性もあるのではないか。解散するよりはそのほうがましじゃないかという話もおそらく出てくる。
- そのようなことを推進はしないが、その可能性は許容していかなければならないという場合に、回覧板は誰が回すのか、防災訓練はどうするのか、民生委員・児童委員はどうするのかなど、地域の役を誰が引き受けていくのかという問題について難しい議論が生じてくる。最も地域を支えてきた自治会や町内会の根底が今揺らぐ中で、家族の問題に照射をしなければいけない。それらをNPOと今までの

自治会だけでカバーできるのか。おのずとうまく収まるような自治はおそらく発生しないので、誰かが介入しなければならず、それは誰なのかということが本当に難しいと思う。

- ・ 2つ目として、ジェンダーギャップの話がある。神戸市には女性の自治会長も数十%いるが、私が住んでいるところはほぼ0%。役員の担い手の話になったときに、会長ができる人が誰もいないというのは、おそらく男性で同じような年齢の方の中で、会長ができる人がいないという話をされている。そこに女性がいても、自治会の役員としての候補になっていなかったりする。つまり、ジェンダーギャップの議論をする前にジェネレーションギャップがあり、時代の流れの中で、これまで正解と思っていた共通言語が違ってきている。
- ・ そこを越えていくリーダーシップとして、スノーフレイクリーダーシップという言葉がある。それはまるで雪の結晶のように、中心におもしろくて楽しい人がいると、義務感や使命感ではなく、楽しい人の周りには楽しい人が集まってくるというリーダーシップである。このようなリーダーシップは、自治会、町内会が苦手としているところであるが、楽しいから人が集まってくるという仕掛けをどう支援し、つくっていくのか。行政がそれを命じてしまうとその時点で陳腐化してしまうので、団体を伴走支援していくことが大事だと思う。結果が出るまで息が長く時間がかかる問題であるところ、どのようにして地域の人材を確保していくのか。地域コーディネーターも含めた公務員の役割や、地域側のコーディネーターの役割が大事だと思っている。
- ・ さらに重要な視点は、子どもの重要性である。これまで子ども中心の地域づくりができていたのかという反省と検証が必要ではないか。奈良市では、子どもの権利条約に従って早くから条例（奈良市子どもにやさしいまちづくり条例）をつくり、児童相談所と子供の居場所づくりが同じ空間でできている。さらに子ども会議というものがあり、子どもたちが考える政策を進めている。

- ・神戸市において、子どもたちが政策の中心にいる地域づくりや子どもたちがどこまで地域の未来に対して発言できる場があるのかについて、教えていただきたいと思う。

○委員発言

- ・市民・団体・行政の関係性の構築の在り方がテーマ1に設定されているが、何のためにこれをつくるのか、何のために協働するのかが決まっていなと、つくるべき制度がずれてくると思う。
- ・少し厳しい言い方をするが、例えば、ケア（福祉）関係に関しては、ほぼ自治会・町内会は役に立たないと思っている。例えば、高齢の方だけが仕切っているような自治会・町内会では、自分たちが今後何をしていけばいいのか分からないというように、課題発見能力が欠如している場合がある。そういった問題があるにもかかわらず、全てを自治会・町内会に果たして期待していいのか。
- ・一方、特定のケア問題において、子どもの居場所づくりや老老介護の問題に対する対応、ケアラー支援、簡単な買い物支援等の身近な問題に対してはNPOがかなり活動されている。ただテーマ別に議論していかないと、NPOの活動がど真ん中に来ないという問題がある。そもそも神戸市として何のための協働づくりを目指したいのかによって主体が変わってくるのではないかと思う。
- ・自治会は全国に満遍なく存在しており、実際にこれまでの環境負荷問題や防災・防犯に関しては、非常に確固たる機能を持ってやってこられたし、地域の親睦活動もしっかりやられている。彼らを軽視しているわけではないが、活動がかなりルーティン化してしまい、それ以外のところに手が回らない、あるいは手を回す気もない、というのが実態としてあるのではないか。
- ・また、男性が仕切っていることの裏を返せば、自治会の仕組みは昭和家族を前提とした男性稼得者モデルである。しかし、自治会のイベント等は主に女性が担っているという自治会も多く、いびつな関係ができています。彼女たちは実務を通じて

今ある地域問題に気付いているが、彼女たちの声は通らない、という状況が依然として強い。こういった状況をどうしていくのかについて議論せずして、何を議論するのだろうという疑問がある。担い手問題はもちろん大事だが、何に対する担い手なのか、問題を共有していかないとずれた議論になるのではないかと思う。

○委員発言

- ・今の自治会は、高齢化によって問題解決能力が乏しくなり、新しいことをすることへのアイデアや気力がなかなかつくれる状況にある。では、自治会はなくていいのかということも一方で議論になるが、テーマ型で活動していくと、どうしても隙間が出てきて、そこを誰かが埋めているという事実も重要なことだと思った。
- ・今まで何十年と続いてきた地域自治の在り方が、今の時代にはそぐわないものに立脚している。価値観の転換が必要になってくるのではないかと思う。
- ・テーマ1の関係性を考えたときに、神戸市の支援の中での関係づくりにおいては、何のための協働なのか、協働の中で何を実現していかなければならないのかを考えていくことが、今回の大きなテーマだと感じた。そして、その中で一体誰を支援していくのか。まだ今の活動の中では大きくカテゴリー化されていないようないろいろなアクターが地域の中に生まれている中で、そういった「誰か」を見つけていく作業も重要だと感じた。
- ・そもそもこれだけオンラインが進み、地域という物理的な拘束条件がなくなった中で、そもそも私たちが暮らす上での地域はどれだけ重要なのか、あるいはどういう意味合いを持つのかということも考えていけたらと思う。

○委員発言

- ・議論の中心が自治会になってきているが、神戸市の場合は戦後、特に自治会を復活させることに対して強く推奨した自治体ではないということもあり、自治会がない地域が割とある。むしろ新興住宅地のようなところは自治会があるが、昔から集落の自治が成り立っているところには自治会がないことも多く、そういう意味

では、自治会だけに絞ると全体像が見えなくなるのではないか。

- ・また、神戸市として自治会に何かを委ねるようなことも特になく、地域自治というものすごく尊重されてきた経緯もある。自治会によって担う部分もばらばらで、ある地域では自治会が担っていることを、別の地域ではふれあいのまちづくり協議会や防災福祉コミュニティが担っていたりする。分野ごとに分けて活動主体を整理していただきたい。
- ・そこから、特に課題となっているところをピックアップして、行政と地域組織との協働の在り方を考えるのはどうか。例えばクリーンステーションを誰が掃除しているのか行政が把握できていない状況について、明示的に自治会に委託する形が今後は望ましいのではないか、といったように、従来から何となく地元の団体がどうにかやってきた分野で、かつ、今後自治会や婦人会が縮小したり、高齢化等により担い手が不足しそうな分野の例示を取り上げて、誰が担っているのか、実態がどうであるかを詳しく見ていくのも一つの方法だと思う。

○委員発言

- ・資料2-2の団体それぞれの役割や、管轄部署があると思うが、そのほかに地域協働局で何か捉えられているところはあるのか。

○事務局発言

- ・資料に記載のもの以外にもいろいろあるが、一度全体を大きく御覧いただくという事で、特に団体数が多いとか、同じような制度に則って支援をしているような団体をまとめて記載している。ただ、例えば財産区等が一定の地域活動を行っている例もあるため、そういう意味で言うともう少しカテゴリーとしても広いところもある。

○委員発言

- ・何のために、誰のために協働していくのかというところは、神戸市としてどのように考えているのでしょうか。

○事務局発言

- ・協働という言葉そのものに関して、神戸市として公的に定義したものはない。
- ・ただ、自治会や婦人会、ふれあいまちづくり協議会等が、先ほどスライドで御覧いただいたような活動、役割を地域で担っているところ、できないところやできなくなってきたところもあり、そういう活動を違う誰かが何らかの形で地域に関わり、支えていけることが、地域社会にとって望ましいという前提で考えている。
- ・自治会がケア関係には不向きであるというご発言もあったが、一方では、高齢世帯の見守りや慰問が大事だという問題意識を持っている自治会もある。したがって、自分たちができない、あるいは役所の手が届かない部分でも、地域としてこういうサービスが誰かの手で継続なり実施されることが望ましいという分野において、それができる人たちが活動しやすいように広げていけたらという思いで、今回の諮問をさせていただいた。
- ・先ほど、NPO等の団体と地縁団体が一緒に何かをするということがしにくく、進まないという話があった。我々も実務をやっている中で、進まないというか、進めるべきかというのもあるが、そういう実態はなかなか難しいという事案も多く見ている。そんな中でも、お互い認め合い、場所を貸す、借りるみたいなレベルから始まり、それぞれの活動がそれぞれのエリアで併存するような考え方や進め方があるのではないか、というのが今現在持っている協働のイメージである。

○委員発言

- ・そもそも協働という議論が出てきた背景には、公共サービスの需要が高まっているが、供給者がいないという現状がある。この議論を進めるにあたり、事業実施の議論になっては本末転倒になってしまうので、地域住民がどのような公共サービスを求められていて、それを誰が提供するのかという問題が特に大事になってくると思う。
- ・かつては行政が中心になれるほどに行政リソースがあったわけだが、今はない状態

で、行政ができることには限界がきている。増税も難しい中で、では誰がどのようにするのかという問題が出てきている。

- ・その際に、自治会や町内会によって防犯・防災の声かけができる対面的な関係性があることはとても大事なことなので、そういう基本的な機能は可能な限り維持して、地域の関係性を地縁組織が築く必要がある。一方で、これまで問題視されなかった問題として、典型的な例で言うとケア問題が大きく、高齢化と共働き化によって手が回らなくなっている。これまでにない現状の中で、こういうサービスがあったらいいのになというところに誰が届けるのか、その仕組みを考えなければならぬ状況にあると思う。
- ・その中で、自治会や町内会が、実際に何か地域にお金が渡されたときにケア問題の解決に使うかというところ、使わない傾向が端的にみられるところが地方ではある。やはり実態としてサービスを提供できるように、社会福祉協議会やNPOに活躍してもらおうとか、別の手段もあると思うし、公共サービスをNPO等に担ってもらうのであれば、当然、安定的に活動するための活動資金や人件費といった費用負担の問題も議論が必要である。
- ・テーマごとに対処すべき問題点は違ってきて当たり前なので、どういう形であれば地域の方々に行政サービス以外の公共サービスが届くのか、そのためにどういう形が望ましいのかについては、小さくてもいろんなサービスがそこにあるということが大事なかもしれないし、それも専門的なサービスなのか、そうではなく人々のつながりがあることで維持されるサービスなのかは分けていかないといけないので、もう少し具体的な内容に絞ったほうが見えてくるものがあると思う。

○委員発言

- ・神戸市内の様々な既存団体の在り方や背景をきちんと確認することは大切だと思う一方で、例えば自身が全く近所につながりがない個人だとすると、正直、自治会でもNPOでもどうでもよくて、何人か知り合いや友達が近所でできるだけで安

心感が全然違うと思う。自治会やふれあいのまちづくり協議会で活動している人は、何だかんだ活動によって近所につながりがあるから孤立しない。そう思うと、その人たちにターゲットを当ててではなく、今つながりがない人たちにとっての近所のつながりを1人でも2人でも広げて、安心できる状況をどうつくっていくかを議論のスタートにしたほうがいいのではないかと思う。

- ・30代、40代ぐらいの人たちにとって、こんなに趣味、関心事のテーマ型コミュニティが世の中にあふれていて、ネットでもリアルでも自由につながれる時代に、無理やり地域で近所とつながる理由なんてなくて、防災のためにとか少し脅しみたいなのを言われても、自分の貴重な時間を割くほど暇じゃないみたいなのころはあるような気がしている。
- ・本当に近所が大事になるときというと、高齢になって車も自転車も運転できない、公共交通機関も使えない、ネットも使えないという状況で徒歩圏内の生活が大事になったとき、子どもが生まれて公共交通機関が乗りづらいとか、すぐオムツ交換ができるように徒歩圏内で生活するとき、災害で交通やネットが使えないとき、その3つぐらいである。
- ・一方で、その状況になってから近所と仲よくなるのは手遅れであるため、普段から楽しいとかおもしろいを理由に近所で知り合いができるところを入り口にしておかないといけない。近所で何人か知り合いをつくっておかないと、実際に困ったときに助け合えないよねという感覚で発展していったこそ、つながるのかなと思っている。
- ・ただ実際のところ、引っ越してきたファミリー層が、ちょっと親しくなった80歳の近所のおばあちゃんを介護するかといわれると、何回か挨拶はするだろうが、上がり込んで介護まではしないだろう。自分たちの環境に近い人たち、共感し合える日常がある人たちだからこそ助け合えると思うので、そういった近しい立場の人とのつながりが近所にあるような環境や関係性を、いかにつくっていくかだ

と思う。

- ・大きなイベントほど参加者同士は仲よくなりづらく、小さいイベントや団体ほど仲よくなれるし、参加者同士話しやすい傾向がある。また、継続のために頑張っている団体ほど、メンバーが固定化し新しい人が入りづらくなっている。さらに、大きくやろうとか、ずっと続けようとか、いい話に聞こえるが、新しい人にとっては排他的で新しい関係性をつくりづらい状況になってしまう。
- ・少人数で、軽くて、いつでもやめられたり離れたりできる関係性のほうが新しい人にとっては優しいのではないかという視点も大事だと思っている。大人数が集まる場を仕切るのは大変で難しいが、2、3人の集まりなら誰でも仕切れるし、仕切れる人たくさんいたほうが良いと思う。
- ・市民に対して、これからの地域における近所の関係性の捉え方を伝える際に、地域団体と市民がサービスの出し手、受け手となる関係性として伝えていくのか、互いに助け合い、シェアするような共存の視点で伝えていくのか、そこが大事なのではないか。

○委員発言

- ・神戸市は都市型なので、知らない人を減らすことが究極のミッションなのではないか。今までの自治会や婦人会、ふれあいのまちづくり協議会等の伝統的な団体ではないようなコミュニティというか関係性が、実は今一番ニーズがあるような気がしている。
- ・ただ行政からすると、そういったニーズがあったとしても、では代表を決めてくださいとなってしまい対応が難しい面があるので、これをどう解決したらいいのかは悩むところだ。
- ・自分たちの地域は自分たちで守るといっても、その方法やアプローチ、住み方、働き方がこんなに多様化している中、既存のやり方で合うわけがない。今どんなところに困り事や寄り添わなければいけないものがあるのか、そこに焦点を当てて

いかないと、どうしても既存団体を活性化するとか、既存の仕組みをどう維持発展させるかみたいなことになってしまい、「誰のための」の部分がぼけて、違うところに支援してしまうようなモデルができてしまう。

- ・市民が生活していくうえで最低限必要な生活基準という意味でシビル・ミニマムという言葉があるが、公共サービスまではいかないが、草刈りをみんなでやることで地域の出会いの場になるとか、夏祭り、地蔵盆のような主要な行事だけではない、もっと小さな活動もあっていいと思う。
- ・自立とは依存先を増やすことだという東京大学の先生がおられるが、まさに依存先というのが選択肢であり、今は選択肢が少ない。自治会か婦人会かふれまちかという完成形ではなく、もっと緩やかにつながることができて、かつ、自分の存在意義を感じることができたり、得意分野を発揮したり、あるいはつながりたいときはつながって、つながりたくないときはオフできる、といったようなことが許容されることを我々が認知し、サポートし、協働パートナーとして向き合うべきだと思っている。
- ・そうすると、1つの形式だけの政策ではなかなか難しくなってくるので、生活レベルのサポートも含めて、今自治が担っている部分を今後誰がしていくのかを考えたときに、活動主体が多様化している神戸においては、地域の中での組み合わせ方をデザインしていく方策が必要だと思う。
- ・三重県名張市が「ゆめづくり地域交付金」の交付を10年以上やっておられるが、そこでは地域の人口割や均等割等いろいろな計算式で交付額を決めており、細かい使い道は地域の中で決めてもらうというお金の出し方をしている。ただ、気をつけなければならないのは、地域の中で使い方を決めるときに、本当に使いたいと思う人がそこに参加しやすいような、あるいはしていけるような状況をつくれているかどうかということだ。
- ・強い絆と弱い絆を望む人が混在しているので、弱い絆でいいと思う人も参加できる

ような居場所、あるいは機会があり、その中でお金が回っていき、主人公が変わったり、支える側が支えられる側になったり、支えられる側が支える側になったり、インやオフをしたりということが選べるような仕組みを議論しなければならないと思う。

○委員発言

- ・今回の答申を考える上で、自治会ありきとか地域団体ありきとか、そこを活性化すればいいという活性化策を考える方向ではなく、そもそも協働とは何か、あるいは地域自治とは何か、神戸の中で何を実現していったらいいのかということ、テーマごとに考えていくということで、委員の皆さんと合意できた。
- ・テーマについては、話に上がったケアや孤立、子ども、あるいは高齢化という大きなトレンドも加味しながらテーマ設定をして議論していったらと思う。

○委員発言

- ・追加として、テーマごとの検討と別に、地域の様々な担い手が自分たちで地域の課題に対してこういうことをやりたいと思ったときに、それができるような活動の場づくりというのも1つの課題だと思う。
- ・地域への愛着が強い方や、自分の住んでいる狭い集落に対して貢献的に活動されている方がたくさんいるところが神戸らしさであり、青年会やお祭りも盛んなので、それを継ぐ若手たちも育っている。そういう部分を見ていると、行政からお願いするだけではなく地域から上がってくるものを吸い上げることも大切なのではないかと思う。

4. 報告

(1) 地域課題に取り組むNPO等に対する補助金について (資料3)

○事務局より資料説明

○委員発言

- ・伴走支援、運営基盤強化というところが7ページにあるが、例えば、区役所の役割

として申請書類を少しブラッシュアップするなどしてバックアップしていることがあるのか。また、神戸市の職員が住民として応募したり、あるいは会計の手伝いをしたりするなど、職員が関与している事例もあるのか。

○事務局発言

- ・今後、採択後に各団体にヒアリングに入り、必要なサポートとして団体につないでいくといったことも想定をしている。そこで、区の職員も一緒に団体のヒアリングを行い、必要に応じて地域の皆さんからの御相談につないでいく、といったことできればと考えている。ただ、申請書類や報告書の作成のサポートについては、今時点では想定していない。
- ・2つ目の御質問について、少なくとも幾つかの団体に退職したOBが関わっているというような話も聞く。また、職員が会計の部分で関わり、アドバイスをもらっているというような団体もある。

(2) 地域コーディネーターについて

(資料4)

○事務局より資料説明

○委員発言

・一人1区あるいは2区を担当するとのことだが、何かしらの事情で一時的に地域に入れなくなった場合、急にコーディネーターが不在になることもある。そのような時のリスクヘッジも兼ねて、京都市のまちづくりアドバイザーにおいては、1人がメイン担当で、もう一人がサブ担当として入っている。そうすることによって比較軸が生じて、例えば、東灘区と兵庫区で全然やり方が違うとなれば、ある意味OJT的に学ぶこともできる。

○委員発言

- ・地域コーディネーターは何の仕事から始めるのか。

○事務局発言

- ・明日以降、実際に各区役所に赴き、各区の地域協働課とよく相談したうえで活動に

入っていこうと思っている。今後、NPO等の新たな担い手との関係づくりが各区役所でも求められてくる中で、そういったところのつなぎの部分と一緒に入ってほしいというような声を複数の区から聞いている。

○事務局発言

- ・そもそも自治会や住民の交流の場、話す場がないと、各地域で何が問題になっているのか、どのような課題を抱えているのかという、もう一つ前の段階の情報が行政には入ってこない状況になる。
- ・これは一例だが、大きな道路の建設をするときは、その道路の概要や工事期間中どんなことが起こるかを住民の方にお伝えする必要があるが、自治会のない地域でどのように情報を伝達して、皆さんからの御意見をいただいたらいいのかという問題に直面したことがあった。工事の概要はチラシを配布すれば伝わるが、それによって皆さんが、こういうことが不安だからこうしてほしい等の意見を伝えたり交渉したりする場がないという課題がある。今までお話をさせていただいているもう一つ前の段階で、こういった課題もあるということを実感したことがあった。

○委員発言

- ・市民と言われる、捉えどころのない存在をどうやって捉えるかという側面として、地域との協働や市民との協働というのが必要だということかと思う。